

経済不況期における東北地方山村の変貌に関する追跡調査と地域間比較研究

人文学部／安食 和宏(教授)

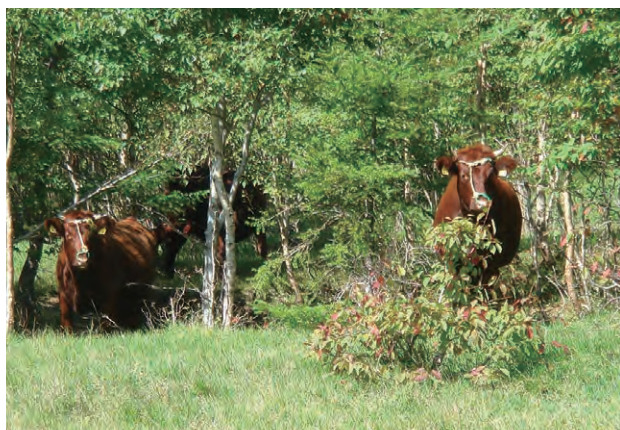
私は、2013～2015年度に科研費の補助を受けて(基盤研究C、課題番号25370912)、標題の研究を進めてきました。私はかつて、1980年代に、東北地方のいくつかの山村地域で、当時のムラの社会経済に関する現地調査を行いました。その後、1990年代以降の経済不況期において、そのムラがどのように変化したのか明らかにしたいと考え、今回同じフィールドで四半世紀ぶりの追跡調査を行いました。ここでは、岩手県の北上山地に位置する岩泉町、その中でも特に北部の安家(あつか)地区の例を紹介します。

まず、安家地区内の集落を対象として、世帯ごとの就業の変化を検討しました。かつて1980年代には、日本短角種牛の飼養と国有林での林業労働が主な経済基盤となっていました。しかしその後、牛肉輸入の自由化などの影響を受けて、肉牛飼養農家は大きく減少しました。林業労働については、国有林野事業の請け負いなどを行う国有林材生産協同組合(国生協)が重要な役割を果たしてきましたが、この組織の縮小も著しく、作業員は激減しました。その結果、伝統的な農林複合(肉牛飼養+国生協労働)が集落を支えるという仕組みは大きく崩れたといえます。

次に、対象集落における社会関係について検討しました。かつては、国生協の労働、農作業の共同作業(ユイ)、合同出稼ぎなど、集落構成員同士が共同で行う仕事が多数あり、それが村落共同体を維持するという仕組みが見られました。しかし、就業の変化と全体的な高齢化とともに、集落内の結合関係は希薄化しました。しかし、その一方で、個別の高齢者世帯を支えるネットワークが確認されます。つまり、ほとんどの高齢者世帯では、転出した子供のうち最低1人は近隣地域に居住し、頻繁に実家に帰り、親の生活を支えているのです。

最後に、山地環境の利用はどう変わったのでしょうか。かつては「夏山冬里」方式での肉牛飼養が卓越していたため、集落が位置する低地から山頂近くの放牧地まで、立体的で巧みな土地利用が見られました。しかし、肉牛飼養の衰退により、採草地として利用されていた山地斜面は放棄され、二次林化が進んでいます。集落近くの耕地でも耕作放棄が目立つようになってきました。以上のように、

1980年代までは、経済(仕事)と社会(共同体)と環境の3者が重なり繋がることによって、伝統的な山村集落の生活が維持されてきました。しかし、かつての生業複合の崩壊と全体的な高齢化などにより、3者全てが縮小したと言えます。人間生活と山地環境との関わりは大きく変わってしまいました。「山村らしさ」が失われていく中で、新たなムラの生活と環境利用をどのように展望したらよいのか、そうした点を引き続き考えていく必要があります。



現在の安家森の様子(H24.09.14)

環境利用の特色: 安家地区北西部の安家森(標高1239m)の草原では、1993年に短角牛の放牧が中止されると、植生が大きく変化し、かつての景観が失われてしまいました。その後、2000年に放牧が再開され、現在では美しい草地の景観が維持されています。